

三心を磨く

学校だより NO. 18

平成29年 9月13日(水)発行

須崎市立 東 中学校

文責：金井 勝久 (教頭)

<http://www.azuma-school.ed.jp/>

9月の校長講話

「何のために学ぶのか」

みなさん、おはようございます。

9月も半ばとなり、大分、日が短くなってきました。秋の気配も、日ごとに色濃くなり、大変過ごしやすい時期になってきています。2週間後に迫った「創立60周年記念、第40回東祭」に向けて、生徒会の役員のみなさんを中心として、着々と準備が進んでいることと思います。3年生にとっては、最後の「東祭」ですので、よい思い出となるように頑張ってください。

さて、今日のテーマは「何のために学ぶのか」ということについて、みなさんに考えてもらいたいこととお話します。

私は入学式の折に、学校目標の「学ぶ心を磨く」について、自分という人間を高め、将来自立できる人間になるために、勉強することが大切だと、話をしました。今日は、「吉田松陰」という人物を取り上げて話をします。

「吉田松陰」というと、知っている人もいるかと思いますが、明治維新を成し遂げた多くの志士たちの、先生に当たる人物で、精神的なよりどころとなった人物です。

吉田松陰の人生は短く、わずか29年間でしたが、自宅謹慎中に開いた松下村塾からは、幕末の日本を変革し、明治維新を成し遂げた多くの志士たちが誕生しました。後の総理大臣となった伊藤博文や山県有朋、明治維新の中心となった桂小五郎、奇兵隊を創設し倒幕の要となった高杉晋作など、多くの英雄がこの塾で学びました。この時代、優れた人物が優れた師を求めて遠路はるばるやってきました。彼らの個性を大きく伸ばし、心に火をつけ、活躍する人材に育てたのは、吉田松陰だと言われています。ところが松陰はわずか2年4ヶ月しか、この松下村塾で教えていません。

吉田松陰は、幼い頃から勉学に励む子どもでした。畑仕事をしながら、和漢の書を暗唱し、10歳の時には藩主の前で兵学の講義を行い、高く評価されました。また、後に海外密航に失敗して獄中にとらわれたとき、多くの書物を読破しています。しかし、単に努力家だというだけなら、いくらでもあります。彼が偉大だったのは、書かれた内容について自分の頭で考え、生きた知識として吸収し、やがては日本を変えていく行動へとつなげたことです。1年2ヶ月の獄中で、彼はその力を存分に発揮しました。野山獄に囚われている



間、彼は囚人たちに書や俳句など、自分が得意とするものを教え合うことを提案し、囚人たちは牢屋の中とは思えぬほど意欲にあふれた集団に変わっていきます。松陰が孟子の講義を始めた頃には、牢の外の役人たちまでが廊下に座って聞き入るようになったということです。学ぶことで人は命を充実させ、人生を変えられるということを、松陰は実践してみせたのです。

松下村塾に入門したいという人がやってくると、彼は「一緒に励みましょう」と言ったそうです。

この言葉はありふれた言葉に聞こえますが、松下村塾での学びのあり方を象徴しています。学問は、完成した人が知識を一方向的に教えるものと普通は考えてしまいがちですが、この言葉は、教える方も学び続けなくてはならないことを語っています。そして、学ぶ者は「何のために学ぶのか」

をはっきりさせ、求めるものがあって初めて助言を得られることを示しています。「教師になるには教師になる資格がいる、弟子になるには弟子になる資格がいる」が、松陰の持論でした。訪れた人は「何のために学ぶのか」と常に問われたそうです。



吉田松陰の生きた時代は、260年も続いた徳川の幕藩体制が行き詰まっていたうえ、ペリーが黒船でやってくるなど世の中が激しく流動していました。今まで通りの小さな自分の殻に安穩としているわけにはいかなかった時代です。幕末の志士たちは、みな20代、30代で大きな事をなし、その途中、多くの者が若くして命を失いました。松陰は、過去の歴史や今起きている事例を取り上げ、それについて塾生は自分ならどう考え、どう対応するか、議論を交わします。その中でお互い判断力を鍛えられ、考える力を磨かれていきました。大部分の者は、松陰のもとでは数ヶ月から1年ほどしか学んでいないのに、自分の頭で真剣に考えて意見を練り上げ、激しく戦わせていく中で、自分の未熟さを乗り越え、自ら高め合える集団になったのです。

松陰は理想のために人生を捧げようと生きたため、その生涯は過激で、時には狂気とすら感じられ、処刑場での死を持って完結する人生でした。しかし圧倒的な知性とカリスマ性がありながら、おごらず穏やかに話し、自由な雰囲気にあふれていました。また、一人一人の個性を見抜く眼力にも優れていたため、強い個性を持った塾生のよい面を伸ばし、時代を変革するリーダーに育てることができました。29年という短かすぎる人生でしたが、弟子たちは、彼が死んでもその志をしっかりと受け継ぎ、さらに大きく成長して、新しい時代を生んだのです。

私は、東中学校も松下村塾のように、ただ知識や技能を身につけるだけの学校ではなく、教えていただいた内容について、みんなで議論し、考え判断し、行動できる生徒が育つ学校にしたいと願っています。

そして、お互いが高め合えるような集団になってくれればと強く願っています。勉強が上から与えられるものではないことに気づき、「一緒に励みましょう」。